

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会 会報

2012年12月24日

41号

発行者 鈴木 克彬

発行所 ぐんま日独協会

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

電話 : 027-288-4297

E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



エアフルト独日協会会長ご夫妻を囲んで

1. 会長あいさつ	2
2. ドイツ音楽コンサート in 軽井沢	3～4
3. 日本庭園を考える	
3-1. 回遊式庭園訪問記	5～6
3-2. 桂離宮訪問記	7
4. クリスマス オルガン コンサート	8～9
5. ドイツ紀行文	10～11
6. ドイツ大使館訪問記	12～13
7. デザイナー修行奮闘記 (連載-1)	14～15
8. 2013年「ドイツフェスティバル in ぐんま」案内	16

1. 会長挨拶

狩猟民族ドイツと農耕民族日本

会長 鈴木克彬

踏切の一時ストップ

日本の踏切では、列車が来る、来ないには関係なく必ず一時ストップ、左右を確認し、踏切を渡らねばならない。もし、停止しなければ交通違反となり、反則金を払うことになる。

ところがドイツでは、警報機が鳴らず、又は遮断機かおりていなければ、バス、トラックを含め総ての車は一時ストップせず、すいすいと渡って行く。日本からドイツに初めて来た駐在員は、まず先輩から「踏切では絶対にストップするなよ。止まって左右など見ていると追突される。その上、もし費用がかかると、先に止まった車に責任が来るぞ、」と教えられるという。

自己責任を強調するドイツ人

「日本は安全確保のため、慎重を期して、車はすべての踏切で必ず一時ストップする。それが日本国のルールだ」との私の説明に対し、ドイツの友人は「列車が来ないのが分かっている、何故止まる必要があるのか。それだけ交通渋滞がおこり、また排気ガスも発生するではないか。もし事故が起こっても、それは自己責任だ」と反論されてしまった。理論として筋が通っており、自己を重んずる狩猟民族の気風を感じた。

まわりを気にする日本人

この様な考え方の差は、数年前エジプトでテロリストが旅行者を殺害した時にも起った。日本国内では政府外務省の危険予報発信不足と旅行社の調査不足を非難する論調が目についたが、一方ドイツでは、“エジプトに行く以上危険は付きもの、そんなのは自己責任”と政府に関しては全く問題にしなかった。

役所、お上、周囲の意向を常に気にし、指示待ちの多くの日本人、やはり農耕民族的発想が身についているのだろうか。一方ドイツ人は、自己主張の強い狩猟民族の代表なのかも知れません。・・・・

お互いの持ち味を・・・

日独交流もお互いに持ち味(長所)を認め、活かしあっていけば、 $1 + 1 = 3$ の成果が生まれるのではないかと、思っています

2. ドイツ音楽コンサート in 軽井沢 (大熊 富吉 記)

ホテルグリーンプラザ軽井沢においてドイツ民謡音楽スペシャルコンサートが開かれた。ドイツ人のヴォルフガング・ヘルツレさん率いるボーホ&アルピナというグループによる南ドイツ民族音楽を中心としたコンサートである。70名程の観客の見守る中、ヘルツレさんとグループのメンバーが現れる。ヘルツレさんはアコーディオンピアノを、上田亜紀子さんはクラリネット・クーグロックケンを、堤拓幸さんはチューバ・アルプホルン・レツフェルを担当した。

司会者より、「今日のコンサートは緊張しないで手拍子で参加してください。」との言葉があった。ヘルツレさんから「グーテンアーベント！」の挨拶があり、コンサートは始まった。元気なアコーディオンの音とともに観客が手拍子を始めたが、拍子は妙にずれていた。ヘルツレさんは、観客の中に外国人が二名いることに気づき一人ずつ出身地を聞く。一名はドイツ人だったので詳しく聞いていた。日本国内の数少ないドイツ人だったので興味があったのだろうか？実は、彼は我々の仲間でドイツサロンの常連でドイツからの留学生ヤニックなのだ。

次は、ゆったりとしたワルツの曲で「シュネーワルツ」である。「隣の人と腕を組んで揺れてください。」と言われたが、始めはあまり乗る気がない観客も曲の心地よさに引き込まれ、いつとはなく大勢が腕を組み揺れていた。私たちは演奏者と一体となって楽しんでいた。続いて「シャッチー」という曲である。これは「私の最愛の人」という意味の愛称である。このあたりから手拍子は自然な感じになり、演奏者と観客の息が合うようになる。さらに「自由人」という曲が続く。アルプス地方を山歩きする人のことを歌ったもので、「いつも楽しい気持ちでいきましょうね。」とい感じられるテンポの良い曲であった。



曲が終わり、「アコーディオンの重さはどのくらいか？」という質問があった。観客から「10 kg!」「30Kg!」などの声があがったが正解はなかった。さらに、司会者はヤニックに尋ねると何と15 kgで正解であった。このアコーディオンは、ほとんどが手作りで、職人さんに作ってもらったそうである。120通りの組み合わせにより、高い音・低い音・和音など出せるということである。例えば、「パリのまちかど」のようなシャンソンから「水戸黄門のテーマソング」のような日本風のものまで曲幅が広い。アコーディオンの値段は「高級車一台分」の500万円ということである。それもそのはず、鍵盤はパール、文字の部分にはダイヤが散りばめられ、ジャバラ部分を広げると美しいアルプスの山の景色が描かれているのだ。美しい楽器で美しい曲を弾くのだからもうたま



らない。それにしても 15 kgもある楽器を長時間持ち続けて演奏するのだから相当疲れるのではないか？いや、疲れしないのかもしれない。というのは、ヘルツレさんが民族衣装を身に着けて登場した時に、太くてたくましいすねを見たからだ。だから、15 kgのアコーディオンを持ち続けることはなんでもないことかもしれない。それにしても音を震わせるのは足の微妙な動きにより「貧乏ゆすり」のように震わせるのだそうだ。足で震わせるのは世界中に彼一人だけだという。アコーディオンの話は自慢話のように聞こえるが、これだけ堂々と自慢できることは良いことだ。なぜなら、このアコーディオンの秘密は話してくれなければわからないからだ。アコーディオンに関する素朴な疑問は、実は知りたいことだった。

次は、「ペッヘルのパルカ」を堤拓幸さんが演奏する。なんと木のスプーンが楽器なのである。彼は片手で 2 本のスプーンを持ち、手や膝や腕に当ててパルカの曲に合わせて音を出す。曲は結構速いので、動きはかなり激しい。この珍しい演奏、やっている本人は疲れるだろうが、見ている私たちにとってはとても楽しい。木が当たる音やリズムがとても心地よい。演奏を鑑賞しているうちに、手と膝と腕の小さな空間で、スプーンそのものがパルカを踊っているような錯覚に陥った。

後半の最初は、アルトホルンである。ホルンは、もみの木を切り抜いて作る。ちょっと傾いている木があったりすると、その傾き加減によって音色に影響を与えるそうである。堤拓幸さんの演奏の後、吹いてみたい人を募集し日本人二名と外国人二名が選ばれて吹いた。三名は音が出たけれど一名は何度も挑戦したが息の音がするだけであった。音を出すのは本当に難しそうだ。続いて、ヨーデルで「ツェタンタール」（オーストリアの地名）をヘルツレさんが演奏しながら歌った。観客は、手拍子とこぶしのところで「ヨーヨーヨー」の掛け声を出す。「皆さん頑張ってください・・・。」曲が終わってヘルツレさんがポツリ一言。さらに上田亜紀子さんによるクーグロックンの演奏。クーグロックンとは、牛の首につけるカウベルのことである。曲はエーデルヴァイス。机に置かれた大中小さまざまなクーグロックンを手に取り、振って音を出す。そして元のところに置く。これを繰り返す。曲がゆっくりだと動作はゆっくりだが、曲が速いと動作も速い。とても美しい音色だった。

次は、「チェキチャクパルカ」で「日本チャチャチャ」のような掛け声の曲である。私たちは、合図を聞いて「ホイホイホイ」と掛け声を出す。曲は速くなったり遅くなったり、大きくなったり、小さくなったりし、それに合わせて掛け声を出す。調子の良い曲だった。最後に、「ふるさと」を皆でドイツ語と日本語で歌った。

観客が大いに参加をして楽しむコンサートであった。会場の人たちをリラックスさせるテクニックを持ちユーモアとおとぼけ面を見せるヘルツレさん、そして珍しい楽器で演奏して私たちを楽しませてくれた上田さんや堤さんに感謝したい。後でわかったことだが、司会者はヘルツレさんの奥さんだった。

3. 日本庭園を考える

3-1. 回遊式庭園訪問記 (近藤 基晴 記)

日本庭園を日本人としてもっと知らなければならない、と痛切に思ったのは2011年5月から6月にかけて行なった日独交流150周年記念のぐんま日独協会会員によるドイツ訪問のときだった。エアフルト独日協会のラインハルト・ヴェートご夫妻を訪問した際に、同市にある日本庭園を見学する機会に恵まれたのだ。

エアフルト市はドイツの真ん中に位置する緑の豊富なチューリンゲン州の州都であり、自然環境は日本における群馬県と共通するところが多い。近くには宗教改革のルターにちなむ土地や、文豪ゲーテが人生の大半を過ごしたヴァイマル（ワイマール）など日本人にも馴染みのある地域であるが、旧東独ということもあってか、日本在住者はわずかである。このようなエアフルト市に日本庭園があること自体が驚きであった。この庭園訪問のあとの夕食会で大議論が巻き起こったのだ。「噴水の先からホースが見えて幻滅だ」「ドイツ人が日本庭園というものを誤解してしまう」「これなら、ないほうがまだましだ」という否定派と「日本人なしでも日本庭園を作ろうとする意欲を評価すべきだ」「これをベースに改善していけばよい」「これを機会に日本庭園とは何かをドイツ人に考えてもらえればすばらしい」という肯定派との議論であった。

ラインハルトさんの自宅の庭にも一部日本庭園を取り入れているが、本人は同市の日本庭園にも自宅の庭園にも満足しているわけではない。日本企業や日本人社会の支援もなく、ドイツ人だけで作り上げた日本庭園が本来の日本庭園からは程遠いことはある面で当然、しかしあまりにも違うのであれば本物に少しでも近づきたい、との思いだ。そのためには形だけでなく、その背後にある日本の精神も理解する必要がある。そこで、ラインハルトさんは今回の来日の際に日本庭園を見たいと希望された。我々日本人もこの機会に日本庭園を深く知る良い機会だとの思いで、ラインハルトさんに同行して11月19日に清澄庭園と旧芝恩賜庭園を訪問した。あいにく曇天で真冬並みの寒さの中の訪問であった。



旧芝恩賜庭園にて
ラインハルトさんらと



ガイドの説明に聞き入る
ラインハルトさん

西洋庭園と日本庭園の大きな違いは、起伏に富んだ左右非対称の日本庭園に対し、整然とした左右対称の西洋庭園、などと言葉に表すことはできるが、その背後にあるものはどうなのだろうか。一口に西洋庭園と言ってもフランス庭園とイギリス庭園ではまるで別物だ。日本庭園といっても座敷から眺める京都の庭園と回遊式で歩いて楽しむ大名庭園ではまた大きく異なる。

名のある庭園はどれもそれなりの美しさはあるが、「わび・さび」を感じさせる庭園がどこにもあるのか。秀吉の金ぴか利休の一輪挿しか。その答えは見る人の心の中にあるのかもしれない。

伝統は形だけをひたすら守り続けるのではなく、時代の変化とともに変革を加えながら発展していくから生きながらえるのであり、そうでないものは滅びていくことになる。貴族の庭園、禅寺の庭園、大名の庭園、豪商の庭園などそれぞれの庭園にはそれぞれの時代の背景があり質も異なっているが、それが総体として日本庭園として生き続けている。そしてどれにも通じる共通項があるとすれば、それが一口で表すことの出来る日本庭園の特色なのだろうか。



背景のビルが邪魔になる場合もあれば、日本庭園とうまく融合している場合もある。

ラインハルトさんは両庭園での案内人の説明に熱心に耳を傾け、時間をかけてじっくりと心ゆくまで日本庭園を堪能し理解を深められたようだ。桜の季節にまた訪れてみたいとも希望されていた。私も季節ごとに訪れてその変化を確かめてみたい。

ブルーノ・タウトは、1933年5月来日した翌日に桂離宮を案内されて、「その簡潔な、素材を十分に活かした建物と庭園からなる空間が、自然と人間の生活との調和をはかり、かつ、京都という伝統ある都市の景観とよく融合して一つの完成された世界を形造っていて、彼の求めてきた建築の理想がすでに実現されているのを知って感銘をうけた」(『群馬県立歴史博物館第32回企画展/1989年』より)。その桂離宮にもやはり一度は足を運ばねばなるまい。

3-2. 桂離宮見学記 (高橋 忠夫 記)

ドイツ人の友人より秋の京都旅行の誘いを受け、ドイツ人4人、日本人2人が出かけたのは11月下旬のことだった。京都旅行の目玉は桂離宮の見学である。桂離宮は宮内庁が管理しており予約して見学が可能になるが、幸いに前日に許可がおりた。ということで見学したのは紅葉の盛りの11月30日だった。

見学時間は9時からであるが、20分程前に到着し、ビデオを見ることになった。30人のグループは概ね年金世代や外国人である。説明員が大声で注意事項を話す、桂離宮の庭園は素晴らしいので30人は気もそぞろである。写真はOKという事なのでほぼ全員が忙しくシャッターを切っている。歩道は定められたところを歩かなくてはならないが写真に夢中になり道をはみ出して苔を踏んで何度も注意される。今年も撮影に夢中になり、橋から池に転げ落ちて救急車が2回も出動したとのことであるが、さもありませんと思う。それほど素晴らしい。説明員よりブルーノ・タウトが桂離宮を世界に紹介した話をしたが、彼が紹介しなくても遅かれ早かれ世界の注目を浴びたであろうことは容易に想像される。紅葉は勿論素晴らしいが、春の桜、夏の雨そして新緑、冬の静寂、雪が降ればさらに良い。建物、庭園、飛び石、歩道、門などに色々な仕掛けがしてあり、見る場所、方向でまるで違う景色となる。細かいところにアッと驚くような発見があり、説明なしでは気がつかないことがどれだけあることであろうか。夢のような90分だった。次回は是非違った季節に見学できるならばこれに勝る幸せはない。



4. クリスマス オルガン コンサート (水尾 謙作 記)

12月2日に前橋シャロン・ゴスペルチャーチで、ぐんま日独協会主催による原鏡先生のパイプオルガン演奏と、原先生率いるコール・詩音混声合唱団の演奏会を行いました。プログラムは前半、後半2部構成で、中に軽いティータイムとケーキを挟んで、クリスマスに因んだパイプオルガンと合唱の交互に組まれたプログラムの喜びを歌いました。



バッハ トッカータとフーガ ニ短調 BWV565 のあらためて重厚な響きをはじめ、それぞれ7曲前後のオルガン曲と、10曲ほどのクリスマスソングそして、最後に皆様と一緒に‘もみの木’‘きよしこの夜’を歌って、お開きにしました。

<オルガン> : ラルゴ (ヘンデル)、アヴェマリア (カッチーニ)、我祈りを聴き給え (メンデスゾーン)、ああ主なる神よ (ヴァルター)、願わくば主があなたを祝し (ルーチン)

<合唱> : マリアは歩みぬ (ドイツ古いキャロル)、アヴェ・ヴェルムコルプス (モーツァルト)、アヴェ・マリア (バッハ=グノー)、カンタータ 147 番より、主よ人望みの喜びよ (バッハ)

<オルガン> : トッカータとフーガ ニ短調 BWV565
~ [ティータイム 30分] ~

<オルガン> : クリスマス・メドレー み使いのたたえ歌うほか・・・4曲

<合唱> : アヴェ・マリア (グレオリア聖歌)、荒野の果てに、ああ ベツレヘムよ、久しく待ちにし、もろびとこぞりて、さやかに星はきらめき

<皆様とご一緒に> : ~ドイツ語と日本語で歌いましょう~
喜びの歌、もみの木、きよしこの夜



合唱団コール・詩音は昨年、原語で宗教曲、賛美歌などを歌いたいという人が集まり混声合唱団を立ち上げました。その3カ月後、ぐんま日独協会では、『日独友好150周年記念2011ドイツフェスティバルinぐんま』を県庁ホールで行いましたが、その記念する日独の国歌斉唱はじめ記念すべき日独の友好深い宗教曲、民謡、教会音楽などを歌い、初ステージになりました。折りしも日独協会会員である、原鏡先生のパイプオルガン演奏の豊かな演奏技量に相まって、団の中心的な舵取りから運営に係わってお願いしています。

まだ、出来たばかりの若い活動団体です。歌を歌う喜び、音楽をとおして、世の中に明るい響きを伝え広めて行こうと願っています。広く、病院、老人介護施設、障害者施設の訪問を行っています。家庭支援、また地域支援、前橋市ボランティアサロンと係わりを含めてボランティア活動を行っています。ほぼ年間を通して毎金曜夕7時より9時まで、市・朝日町、第2コミュニケーションセンタ（保健センター3階）で練習をやっています。歌を歌う喜びを通してボランティア活動をしたいと願う人達を広く募集しています。地域、家庭から、市、群馬県、全国、ドイツ、そして世界へと繋がった喜びを歌いあげませんか、お待ちしております。

5. 久しぶりのドイツ（長谷川 早苗 記）

ドイツに行こうと決めて、さていつがいいかと考えて、わかりやすくひと月いることにした。11月1日に日本発、30日に帰国。よく考えてみたら、2002～2003年にマンハイムに語学留学して以来で、もう9年も経っていた。ほぼ10年ぶりのドイツだった。そして、思い返してみると、あのときも似たような発想で、12月1日に出国して、ワーキングホリデービザの期限ぎりぎりの11月30日にドイツを発っていた。なぜいつも同じ時期に移動するのか……は、わからない。

久しぶりすぎるドイツでまず何をするかといったら、友人知人に会う。向こうで知りあった人もいれば、群馬で知りあった人もいる。国籍問わず、もう各地で働いている人が多い。というわけで、ベルリン、ハンブルクに数日、むかし勉強で滞在していたゲッティンゲンの友人夫妻のところに寄ってから、マンハイムに入る。ここでは2週間ほど部屋を借りて過ごし、マイントの友人、シュトゥットガルトに住む恩人（最初のドイツ語の先生）を訪ねる。それから、デュッセルドルフ、ケルンに移って、フランクフルトへ。計9か所、23人を訪ね歩く、まさに友人に会う旅だった。

ほぼ10年ぶりに見たドイツは、街中に英語やアメリカ系のチェーン店が増えていた。場所によっては夜10時まで開いているスーパーもある。効率化や経済を重視せざるをえないのだろう。それから、家賃が高い、高くなったという話を何か所で聞く。実際に新聞の記事にもなっていた。

9か所を回ると、街の雰囲気の違いが感じられる。とくに初めて行ったハンブルクとデュッセルドルフが印象に残った。ハンブルクは噂どおりのおしゃれな街。笑っちゃうほどおしゃれなカフェがあって、「いや、ここは入れないでしょ」と内心つつこんだが、住んでみたくなる街だった。デュッセルドルフはお金のありそうな街。日本語で「〇ユーロです」と言われるのが新鮮だった。

いまさらながらの自己紹介だけれど、私はドイツ語を訳したり教えたりする仕事をしている。日常的にドイツ語に触れていて、多少は話す機会もあるとはいえ、普段は読むほうがメインだし、会話がどうなるか不安がなくなかった。もちろん、ホテルや電車の手配、買いものといった旅行会話程度であればなんとかなる。たいしたことは話さないし、逆に「あ、今日あんまりちゃんと話してない」という日もあったくら



【ベルリン国会議事堂】



【ケルン大聖堂】

いだ。

けれど、例えば、借りていた部屋の家賃を銀行振込みするよう言われたとき。ドイツに口座を持っていれば、ATMであつという間に終わる作業だが、口座がなければ窓口に行って頼まなければならない。以前はこうした手続きで、日常語とは違う言葉を使えば一つと話されると、わからなかった。そしてそのたびに、「明らかに外国人なのに、あんな手加減せずに話すなんて親切じゃないなあ」と思っていた。けれど今回は、「ああ、わかるわ。前はわからなかっただろうな」という感じで、勉強していたころと、仕事をしているいまとで、ドイツとの距離感が変わってきていると実感できたのは収穫だった。

仕事の関連で言えば、移動が多く、日本から来る翻訳の仕事をなるべく受けていたために、本や映画を見る時間が少なくなってしまったのは残念だった。1か月あればゆっくりできると思っていたけれど、実際はもっと時間がほしかった。それでも、美術館や博物館に行ったり、本屋や図書館を回ったり、映画祭に行っていかに映画が好きそうな客層にわくわくしたり、たまたま入った展覧会で古書をじっくり眺めたりできた。古書については前に仕事でかなり調べたが、やはり実物を見るのはいい。

ハンブルクでは運よくちょうど友人のコンサートがあつて、演奏を聞くことができた。会わなかったあいだに結婚した人もいれば、子どもができた人もいる。結婚してない女友だちが集まれば、「結婚した？ 彼氏いる？」の話になるのはどこでも同じ。久しぶりに会った友人たちは仕事をして大人になっていたし、今回知りあった人たちもいて、なんとも楽しい旅だった。すっかり刺激を受けて帰ってきたので、またみんなに会えるよう、私も仕事に励もう。



【ハンブルクの聖ミハエル教会】

ちなみに、来年3月に群馬で研修予定の学生にマンハイムで会ってきました。一所懸命、日本語を学んでいるかわいらしい女性です。ドイツサロンなどで会う機会があると思うので、お楽しみに。

6. ドイツ大使館・ドイツ文化センター訪問記（平方 秋夫 記）

去る11月21日（水）、晩秋の佇まいを見せる東京、港区南麻布にあるドイツ連邦共和国大使館を訪問しました。ぐんま日独協会訪問団には鈴木会長以下協会員27名と、ちょうど来日中のエアフルト独日協会会長ご夫妻（ご夫人はぐんま日独協会の会員でもある）も参加しました。

午前7時40分に高崎駅2番線ホームに集合、湘南新宿ラインにて恵比寿駅下車、地下鉄日比谷線に乗り換え、広尾駅には10時30分に着き、11時にドイツ大使館に到着しました。入場の際には身分証明書の提示が必要で、参加者の多くがドイツ大使館訪問は初めての経験で少々緊張気味でした。

大使館のスタッフの方々は私達を暖かく迎えて下さり、最初に会議室に案内されて、大使館の業務について映像を交えて丁寧に説明していただきました。

その主な業務とは、ビザの発行と各種申請手続き、ドイツに関する情報提供、芸術・文化交流、経済交流、各商工会議所との連携、各種イベントの立案と実施、等であります。特に話題に上がったことは、昨年3月11日東日本大震災に際して、ドイツからの大きな援助と見舞金についての言及もありました（ドイツ国家・企業・個人からの寄付・資金援助は合計で6000万ユーロ超、約60億円超）。

業務のお話の中では、私達の知らないことがたくさんありました。大阪にある大阪・神戸総領事館が愛知以南を統括し、東京の大使館が静岡以北の地域を統括していること、また日本在住のドイツ人が8,000名いることなどなど。ドイツ大使館のHPはこれら8,000名の在日ドイツ人に対する情報提供と日本人に対する情報提供が主な役割とのことでした。

およそ30分の説明の後、付属する日本庭園を案内してもらいました。江戸時代の大名屋敷の跡地を利用しているとのことで、樹齢数百年の樹々と美しい庭園の散策は、優雅な風情ある都会の中のオアシスを感じるものでした。



その中にある世界平和を祈る「平和の鐘」の存在と、近くにある小さな祠が東日本大震災により受けた被害をそのままにしてあることが紹介され大変深く印象に残っています。



「日独友好親善之鐘」の文字とその反対側に彫られたゲーテのことば
„DIE TÖNE VERHALTEN, ABER DIE HARMONIE BLEIBT : Goethe“

鐘を撞くエアフルト独日協会
ラインハルト・ヴェート会長

大使館隣の有栖川宮記念公園の一角で、昨年日独交流150周年を記念して植えられた菩提樹の若木も同時に見学しました。



【群馬県に植樹された菩提樹より成長が早いような気がしました。】

大使館を辞し、私達一行はタクシーに分乗して赤坂にあるドイツ文化センター（ゲーテ・インスティトゥート）へ移動。午後1時頃到着し1階のレストランで昼食をとりました。

その後、2階にあるセンター図書館を見学。説明を受けて日独の関連図書を見て回ってから利用案内をいただき、多くの参加者がその場で利用者登録を済ませました。（登録希望の人は事務局まで連絡下さい。）

次に4階のドイツ観光局を訪問。ここではドイツ観光地の情報を得ることが出来、パンフレットは自由に手に入れることが出来ます。また多くの都市情報、イベント情報、旅行情報等の発信基地となっています。観光局長ペーター・ブルーメンシュテンゲルさんの楽しい説明を西山晃さんの通訳で聴き、楽しい一時となりました。局長さんは「どうやったらもっと多くの日本人にドイツに来てもらえるかを考えることが私の使命」と話しておられました。

最後に1階のDAAD（ドイツ学術交流会）を訪問しました。ここは、大学間における国際交流を促進する役割を担っており、ここでお世話になった方々は多く存在し、各界で活躍をされています。

日常の生活の中では経験できない大使館訪問や文化センター訪問は貴重な体験となり、秋の一日充実した気分で研修会を終えることが出来ました。

7. デザイナー修行奮闘記 - 連載 1 (井上 晃良 記)

鉄道デザインの目覚め

今から 30 年前になろうか、幼少の頃から鉄道好きだった私が「デザイン」を鉄道にみた瞬間があった。それは私が高校生だった頃のことである。当時の私は鉄道研究部に属し、暇さえあれば車両の写真を撮りに出掛け、また部活で鉄道模型の製作に励む日々であった。それより以前、小学生時代の私は時刻表と鉄道趣味誌が愛読書であり、空想で鉄道旅行したり、駅名の暗記なども得意であった。私が通っていた高校を選んだ理由の一つも鉄道研究部があることが重要であったからだ。つまるところ、高校迄の私は、どこにでも居そうな今でいう「撮り鉄」であり、鉄道趣味誌の発刊日を毎月楽しみにしているような少年であった。ただ、少し違ったのは、家で飽きずに遊んでいた鉄道模型が小学校低学年時に母の欧州旅行土産で貰った西ドイツ、メルクリン社製の H0 ゲージであったこと。西ドイツ国鉄の 103.1 形が牽引する TEE が憧れで、中学生時代に貯金したお金をはたいて買った、その 103.1 形モデルは、今でも大切に保管している。鉄道模型を通して漠然と西ドイツやヨーロッパの鉄道にも興味を持っていたことであろうか。更に、私が幼かった頃、我が家にはメッサーシュミットという西ドイツのバブルカーと呼ばれる珍しい 3 輪自動車があり、父母はそれを日常の足にしていた。(と言っても、すぐに故障するので、あまり役には立っていなかったのかも知れないが) 母は私が生まれる前、西ドイツのハンブルグに商社で服飾デザイナーとして駐在していたことがある。父は洋画家としてパリの美術学校に留学していたこともあった。そのような両親の元で育ったためであろうか、自然にヨーロッパの素晴らしさを両親から耳にしていたのであろう。そして私自身も鉄道模型や稀に掲載される西ドイツの車両達にある種の憧れ.. . と言うより日本のそれと異なる魅力に取り憑かれてしまっていたのだと思う。

美術大学へ入学し工業デザインの道を目指していた高校生時代のある時、目にした自動車デザイン雑誌に、デンマーク国鉄 (DSB) の新しい CI 計画が成功し、その成果が掲載された記事であった。それは、それ迄にない斬新さとシンプル、大胆で訴求力の強いものであった。また、それはデンマークという土地を強く意識した伝統ある色調で整えられ整理された、しかし力強いデザインであった。車両のカラーリングはもちろん、駅舎やサインだけに及ばず、車両のエクステリア、インテリアデザイン、ポスターやグッズにまで及んだ統一されたデザインが DSB に良いイメージと新しい利用者呼び込む大きな力となったのである。また、1985 年に西ドイツのノイマイスターデザインによる西ドイツ国鉄初の新幹線電車の試作形である ICE-V を写真で見たときも、それまで何となく感じていた鉄道とデザインの関連性とその必要性を「鉄道車両こそデザインが重要である」と再認識したのである。

これらのデザインを知った私は、それまで漠然と持っていた将来進みたいと思っていたプロダクトデザインの世界に「鉄道」が存在しうることを知った瞬間でもあったのである。

ヨーロッパ研修旅行

高校を卒業後、1年の浪人生活を経て通った大学は、西ドイツのウルム造形大学の流れを汲む美術大学であった。私が学んだ機器デザインコースでは、コンセプト中心の機能主義的デザインであり、その本場である西ドイツという国への憧れを一層強くするものであった。その一方で、私が大学で工業デザインの勉強をしつつ感じていた大きな疑問が、幼少の頃から憧れていた西ドイツとそこにある鉄道車両や自動車、またブラウン製品に代表されるプロダクトのデザインの持つ一貫した機能美と日本のそれとは異なる理由を知りたかったことである。

その疑問と更なる決意が決定的になったのは、3年次の冬に行われたヨーロッパ研修旅行である。それは1985年の冬休みである。まだ、格安航空券などない学生時代に憧れていたヨーロッパへ、しかも幾つかの興味深い企業でのデザイン部門の見学もある。生まれて初めての国際線旅客機は、南回りではほぼ丸1日掛けて到着した。フランクフルト空港から更に乗継ぎ、オランダのアムステルダムスキポール空港へ、そこからバスで最初の目的地であるフィリップス本社のあるアインドホーフェンへ到着した。オランダに到着してから見るもの全てが新鮮に映ったのは言うまでもない。アインドホーフェンから初めて鉄道を利用して国境を越え西ドイツに入国。途中私の乗る車内から窓越しに見たインターシティの食堂車の車内風景があまりに優雅に見え、ヨーロッパの車両への憧れが更に膨らんだのは言うまでもない。西ドイツでは観光地や自動車会社のデザイン室を巡る旅程を過ごしたが、見るもの全てが学ぶべきものであるほど私にはインパクトが強かったのである。その後スイス、イタリア、フランスと約2週間の旅程をこなしたのであるが、私にとっては、幼少の頃からの憧れの国である西ドイツが最も印象が良く、この旅行を通して、もう一度西ドイツへ来て、この地でトランスポーターデザインの仕事をしたいという強い気持ちが生まれたのである。

(続く)

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 01』に掲載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただきました。)

8. 2013年「第5回ドイツ フェスティバル in ぐんま」のご案内

1年おきに開催の「ドイツ フェスティバル in ぐんま」の次回開催は2013年5月の予定です。前回開催の2011年は日独友好150周年にあたり、150年の歴史の出発点となったプロシアのオイレンブルク遠征隊をテーマとしたパネル展示を行い、好評を博しました。

岩倉使節団ドイツ訪問140周年記念パネル展

2013年は岩倉使節団のドイツ訪問140周年にあたります。日本がドイツを手本として近代化を押し進める契機になったのが岩倉使節団であり、弊協会では140周年を記念して当使節団をメインテーマとしてパネル展示を行います。2012年4月から毎月勉強会を開催して、岩倉使節団派遣の背景、現地での見聞内容、帰国後の政府内での葛藤、最後にドイツ派が実権を握っていった経緯などを分かりやすくまとめる作業を進めています。「故きを温ねて新しきを知る」。重苦しい今の世界状況のなかで歴史の教訓を活かせれば、との思いもこめられればよいと思っています。

オリジナルパネル20枚内訳

全国日独協会連合会でも私達の取り組みにご理解をいただいております。要請があればパネルの貸し出しも可能です。すでに、いくつかの日独協会からは貸し出しの要請を頂いております。ご希望の場合は、ぐんま日独協会事務局までご連絡ください。なお、パネルの概略構成は次のように計画しています。

パネル00	会長挨拶
パネル01	回覧実記
パネル02	幕末の使節団と留学生
パネル03	目的と使命
パネル04	規模
パネル05	回覧ルート
パネル06	使節団誕生秘話
パネル07	約定12カ条
パネル08	米欧実態
パネル09	ビスマルク
パネル10	ドイツでみたもの
パネル11	日本の望ましい姿
パネル12	明治6年の政変
パネル13	明治14年の政変
パネル14	お雇い外国人
パネル15	留学生1
パネル16	留学生2
パネル17	医学1
パネル18	医学2
パネル19	新島襄と使節団
A4用紙	参考文献

以上